

国際理解教育のための「異文化理解講読」 ～コミュニケーション学と言語学～

高橋 潔

1. はじめに

筆者はほとんど毎年本学で「異文化理解講読」を担当しているが、異文化理解であれ、国際理解であれ、英語教育であれ、外国語教育であれ、日本語教育であれ、人間と人間の情報交換であれ、人間と他の生物や生物同士の情報交換であれ、人間と機械間の情報交換であれ、とにかく情報交換の基本はコミュニケーションである。人間と無機物的環境の間でも、人間は無機物を人間や他の物に置き換えるメタファーによって、実際は交換でなくとも、情報交換をしているように解釈する。それは、Lakoff and Johnson (1980)で示されているように、人間の理解や思考にメタファーが使われているからである。従って、授業の冒頭でコミュニケーションの定義づけの話をすることもよくある。そこで、本稿は、サブタイトルにあるように、コミュニケーション学と言語学の基本的関係を略説する。まず、「コミュニケーション」という言葉そのものの語源的・文化的紹介から始め、コミュニケーション学と言語学との関係を略説する。

2. “Communication” と「コミュニケーション」

寺澤(1997)によると、英語の communication という単語は1400年以前に、「交わり」という意味があったようだが、もともとラテン語起源の語で、communicate という動詞の名詞形である。動詞 communicate は communic(=common)+ate(...にする)、つまり、何かを common にすることとということであり、common は「共に役立つ・互いに役立つ・共有の」という意味をもっているとされている。何を役立つようにするのであれば、共に役立つ・互いに役立つようにするためには、複数の人間の間で一定の理解の共有が必要になる。コミュニケーションを、人間と人間との間に共通性をうち立てる行為全般と考えることもできる。

日本では、1600年に豊後の国に漂着したオランダ船リーフデ号で来日したイギリス人 William Adams(1564-1620)が、徳川家康(1542-1616)の旗本三浦按針となった後、イギリス東インド会社司令官 John Saris(1579-1643)がイギリス国王の James I(1566-1625)から日英の通商修好を求めて、三浦按針とともに徳川家康に謁見した際、携えてきた国書に出てきた communicacon という communication の古形に「流通(るつう)」という訳語を当てたのが最初のようなのである。¹

最近の日本語ではコミュニケーションというカタカナでそのまま表現することが多いが、少し前までは「意思の疎通・疏通」などと和訳されることが多かったようである。「意思」は、心の中に思い浮かべる、何かをしようという考え・思いのことであり、「疎通」や「疏通」は、(意志・気持などが)相手によく理解され、通じること、と理解される。

3. コミュニケーション学と言語学

コミュニケーション学は、既存の学問分野からいえば、従来は言語学(linguistics)や社会心理学(social psychology)や記号論(semiotics)あるいは文化人類学(cultural anthropology)などの学問分野の一部としてそれぞれ研究されてきた領域で、20C後半になると、さらに精神病理学(psychopathology)・通信工学(communication engineering)・コンピュータ科学(computer science)など多様な学問領域が関わっている学問で、明確に確立された1つの学問分野とは言い難いかもしれない。それは、科学的な意味でのコミュニケーションという用語の定義が明確でないことも1つの要因と考えられる。(むろん、定義づけができないから、用語や学問が成立しないというわけではない。)しかし、どのような定義であれ、少なくとも、20世紀末頃の段階では、コミュニケーションの定義には、必ず言語学との関係があったことを以下で説明する。

植村・松本・藤井(2000)によると、1950年代から1970年代にかけてコミュニケーションの定義には126の定義が見られ、それらは次の4類型にまとめられるという。

- (1) 刺激—反応説：コミュニケーションとは、送り手としての個人が、受け手としての他者の行動を変容させるために、刺激（通常は言語的記号）を伝達する過程。
- (2) 意味付与説：コミュニケーションとは、1人の個人からもう1人の個人に意味を移す過程である。(あるいは) コミュニケーションとは、記号を選択・創出・伝達することによって、伝達者と同じ意味を受け手が知覚出来るようにする過程である。
- (3) 修辞説：コミュニケーションとは、ある特定の状況（場面）のもとで、個人（行為者）がメディア（手段）を選択したうえでシンボルを駆使して（行為）、意図された特定の目的を達成するために（目的）する行動である。
- (4) 相互作用過程説：コミュニケーションとは、他者を理解し、かつ他者からも理解されようとする過程で、状況全体の動きに応じて、ダイナミックで、常に変化する動的なもの。

まず、(1)の刺激—反応説は、明らかにアメリカ構造主義言語学(American structural linguistics)の意味の定義に依存したものである。Bloomfield(1933)の意味の定義そのままと言ってもいいが、これは、もともと、Watson(1919)の提唱した行動主義心理学(behaviorist psychology)から影響されたものである。人間の行動を筋や腺の反射など要素的レベルの反応に分解し、複雑な行動も要素的な刺激(stimulus)と反応(response)の関係に還元して考えることができるというもので、このような考え方の時代的背景は、社会学の父とも言われる A. Comte(1798-1857)にまでその起源を遡ることができる(論理)実証主義((logical) positivism)を指摘することができる。論理実証主義は理系・文系を問わず、20世紀前半の科学界の一大潮流となった思想である。

(2)は、やはりアメリカ構造主義言語学であるが、これは、Shannon and Weaver(1949)に代表されるメッセージモデル(message model)の影響を受けた定義づけと見なされるが、その背景にあるのは、Wittgenstein(1921)の意味の指示説(referential theory of

meaning)である。

(3)は、Austin(1962)やSearle(1969)の発話行為理論(speech act theory)の影響を受けた定義で、その背景にあるのは、Wittgenstein(1953)の意味の使用説(use theory of meaning)である。

(1)～(3)の定義づけについては、「記号」や「シンボル」という用語も見られるが、これは、Saussure(1916)の創始した記号論を無視してコミュニケーション学は成り立たない、言い換えるなら、コミュニケーションは、本質的に、記号を使わなければ成り立たないことを意味していると言える。

(4)は、発話行為理論から発した Grice(1967)の会話仮説理論(conversational hypothesis theory)や、さらにそこから発展した Sperber and Wilson(1986)の関連性理論(relevance theory)の影響を受けた定義づけである。

このように、少なくとも20世紀末には、コミュニケーション学の言うところのコミュニケーションは、言語学と切っても切れない関係があったわけで、国際理解教育のための異文化理解が、表層的理解に終わることのない、掘り下げた理解をするためには、言語学やその周辺・関連領域の知識が必要不可欠である。コミュニケーションと言うと、すぐ、国際性や異文化という社会性に目が向きがちであるが、Habermas(1981)に代表される社会学的指向性のあるコミュニケーション理論も、実は、深い言語学的知識と理解に裏打ちされており、国際理解教育のための異文化理解には、言語学、特に、意味論・語用論・談話文法・テキスト言語学などの知識と素養、そしてそれに根ざしたコミュニケーションの理解が必須なのである。

注

1 John Saris や徳川家康との関係、及び戦国時代末から江戸時代初期の日本での三浦按針の活躍については、Milton(2002)参照のこと。

参考文献

- Austin, J. (1962) *How to Do Things with Words*. Harvard University Press, Cambridge, Mass. (坂本百大(訳)『言語と行為』, 大修館書店)
- Bloomfield, L. (1933) *Language*. Holt, Rinehart and Winston. (三宅鴻, 日野資純(訳)『言語』, 大修館.)
- Grice, Paul H. (1967) *Logic and Conversation*. Unpublished Manuscript, from the William James Lectures 1967, Harvard University.
- Habermas, J. (1981) *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bde. 1-2, Suhrkamp Verlag, Ffm. (河上倫逸・M・フーブリヒト・平井俊彦・藤沢賢一郎・岩倉正博・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎・丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田数実・馬場孚瑛江・脇圭平(訳)『コミュニケーション的行為の理論』, 上中下3巻, 未来社.)

- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳)『レトリックと人生』, 大修館)
- Milton, G. (2002) *Samurai William*. Hodder and Stoughton Ltd. (築地誠子(訳)『さむらいウィリアム: 三浦按針の生きた時代』, 原書房.)
- Saussure, F. (1916) *Cours de linguistique générale*. (Publié par C. Bally et S. Sechehaye avec la collaboration de A. Riedlinger) (W. Baskin (英訳) *Course in General Linguistics*. McGraw-Hill.)
- Searle, J. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊(訳)『言語行為: 言語哲学への試論』, 勁草書房.)
- Shannon, C. and W. Weaver(1949) *The Mathematical Theory of Communication*. University of Illinois Press. (長谷川淳, 井上光洋(訳)『コミュニケーションの数学的理論: 情報理論の基礎』, 明治図書出版.)
- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell. (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子(訳)『関連性理論: 伝達と認知』, 研究社.)
- 寺澤芳雄(編)(1997)『英語語源辞典』, 研究社.
- 植村勝彦・松本青也・藤井正志(2000)『コミュニケーション学入門: 心理・言語・ビジネス』, ナカニシヤ出版.
- Watson, J. (1919) *Psychology from a Standpoint of a Behaviorist*. Lippincott.
- Wittgenstein, L. (1921) *Tractatus Logico-Philosophicus*. Routledge & Kegan Paul. (奥雅博(訳)「論理哲学論考」, 山本信・大森荘蔵(編)『ウィトゲンシュタイン全集1』, 1-120, 大修館書店.)
- Wittgenstein, L. (1953) *Philosophical Investigations*. Blackwell. (藤本隆志(訳)「哲学探究」, 山本信・大森荘蔵(編)『ウィトゲンシュタイン全集8』, 1-462, 大修館書店.)